



街灯の下だけで鍵を探していませんか？
モラロジを学び、最高道徳を実践して、道徳の世界を広げましょう。

ですが、一方で、問題のとらえ方や改善への考え方が安易で固定観念化した場合も少なくありません。街灯の下を探しただけで、あきらめてしまっているのです。これまで本コーナーで紹介してきた通り、モラロジには「自我」「慈悲」「義務」「伝統」などのキーワードがありますが、それらの意味合いは一般的なものとは微妙に異なります。これらのキーワードに基づく道徳の考え方は、それまで見えなかった新しい問題の解決策を示してくれます。モラロジを学び、最高道徳を実践すれば、個人の道徳の世界は広がり、生き方を見直すこともできます。

注意が必要なのは、モラロジや最高道徳が、従来のルールや道徳観など、いわゆる普通道徳を否定や過小視するものではない点です。道徳の問題は基本的に対人関係に関わるものです。まずは社会のルールをしっかり守り、思いやりの心を十分に発揮しなければ、相手や周囲から受け入れられません。そのうえで最高道徳を実践すれば、実践者に加え、相手や社会にもよい結果をもたらし、そこからまた道徳が広がっていくのです。

モラロジ研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジ概論』について、今月は最終項の「最高道徳実行のすすめ」を図解します。



モラロジを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジ概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

広げよう道徳の世界

——最高道徳実行のすすめ

柏生涯学習センター研修企画担当 望月文明 もちづきふみあき

「街灯の下で鍵を探す」という例話を存じですか。

ある晩、警官が夜回りをしていて、街灯の下でひざをついて何かを探している人がいます。警官が近寄って事情を尋ねると、その人は「鍵を落としたので探している」と言いました。そこで再度「街灯の下で落としたのか」と尋ねると、「そうとは限らない」と。「ではなぜここで探すのか」と言うと「ここが明るいかからだ」と答えた、というものです。

この例話は「探しやすい場所ばかりを探して、肝心な部分を見逃している」という人間の一面を示したのですが、日常生活で直面するさまざまな道徳問題の場面でも、この例話のような現象が起こっているのではないのでしょうか。

道徳問題に直面した際に、私たちは「原因は何か」「以前はどのように対応したか」「ほかの人ならどうするだろうか」などを考えながら解決や改善を図ります。しかし一度、收拾がつかなくなると、簡単に「どうしようもない」「自分に責任はない」と消極的に考えがちです。確かに容易に解決策が見つからない深刻な場合もあり